大学生への授業外支援活動の報告

― 創造学習センターにおける「ラーニング・カフェ」の試み ―

岸本 栄嗣

一、はじめに

大学内での学生の孤立は、時に長期欠席や退学へとつながる場合がある。退学は大学側にとって悩ましい問題ではあるが、学ぶ意欲をもつ学生本人にとっても不本意なことであり、学生の立場に立った学生支援や予防策が必要である。

本稿は、本学創造学習センターが長期欠席・退学予防の一環として二〇一四年度から取り組む「ラーニング・カフェ」について報告するものである。この活動のねらいは、学生が何らかの事情で大学から足が遠のきがちとなっても「ラーニング・カフェなら行ける」という場となることである。さまざまな事情・問題を抱えながらも、学生が大学に足を運び続けるきっかけとなることを期待している。ここでは活動概要を紹介するとともに、二〇一八年度の参加者数や参加者へのアンケートの結果を報告し、本活動の担当者として若干の考察を加えた。

二、「ラーニング・カフェ」の紹介

（一）活動の概要

二〇一八年度に実施した「ラーニング・カフェ」の概要は次のとおりである。

〈内容〉

・学生が気軽に立ち寄り、学習や制作、学生生活などについてお茶を飲みながら自由におしゃべりや相談ができる場。学部生は誰でも参加でき、途中の出入りに制限はない。提供型のプログラムは行わず、それぞれのニーズ、ペースで過ごすことができる。

・担当者（専任教員一名、非常勤一名）は、場全体を見守りつつ、個別に声をかけたり、質問や相談に応じたりするなど、全体と個別の両面をケアする。

〈実施場所〉

・学内のオープンスペースの一角。

〈実施回数〉

・通常の授業期間中　計四五回（六〇講時分）

・前期（一五回）：木曜日　一四：五〇～一七：五〇

・後期（三〇回）：月曜日・木曜日　一四：五〇～一七：五〇。

＊一四：五〇～十七：五〇は四～五限目の時間帯

〈学生への周知〉

・学修ガイドブック、創造学習センター履修ガイドへの掲載。

・入学時の創造学習センターガイダンスでの口頭告知。

・案内チラシの掲示。

・保健センター来所者への情報提供。

学生の過ごし方はさまざまだが、懇話、授業課題（宿題など）、読書、ゲーム、休憩、自主制作や個人作業などが多い。授業課題や制作について、学生間で教えあったり、コメントしあったりする場面がよく見られた。

前任者が担当した二〇一四～二〇一五年度は、担当者が小さなプログラムを設定、リードすることもあったようだが、二〇一六年度以降は提供型のプログラムは実施していない。なお、二〇一四～二〇一七年度は非常勤一名が担当していたが、二〇一八年度は専任教員一名が加わり二名体制であった。担当者は、それぞれコーチングの実務経験者（女性・非常勤）と発達相談の実務経験者（男性・専任教員）である。

担当者は、場やお茶、お菓子の提供を中心に、まんべんなく声をかける、雑談に加わる、初参加学生に同学科学生を紹介するなどゆるやかに対応する。場への馴染みにくさやコミュニケーションの苦手さがうかがわれる学生にはていねいにかかわるようこころがけている。

時折、学生から進路や人間関係、授業課題（レポートなど）などに関する相談を受けることもある。できる対応はしつつ、必要に応じてキャリアデザインセンターの利用を促したり、保健センターや学生相談室との連携を行ったりすることもあった。

（二）活動の状況

二〇一八年度の参加者数（平均人数以外は全てのべ人数）は前期三九九名（平均二六.六名）、後期七一九名（平均二四.八名）、計一一一八名（平均二五.四名）であった。月別の平均参加者数を図1にまとめた。

参加者には、毎回名簿への記名（抵抗感を緩和するためニックネームでの記入を認めている。）を求めており、それを月末に集計している。数値は全てそれにもとづいている。ただし、出入り自由という活動の性質上、ほぼ毎回数名の未記入者がいる可能性がある。したがって、実際の参加者数は表記より若干多い。

月によって実施回数が異なるため、月別の参加人数には違いがあるが、月別の平均参加者数を見ると、極端な変動は見られない。また、後期は実施回数が倍（週二回）になっているが、やはり前期と比べて平均人数は大きく変動していない。参加者数が年間をとおして安定している状況からは、学生のニーズも安定していることがうかがえる。なお、一二月がやや少なめであるのは、授業課題や卒業制作の提出が集中する時期であることが要因であると思われる。

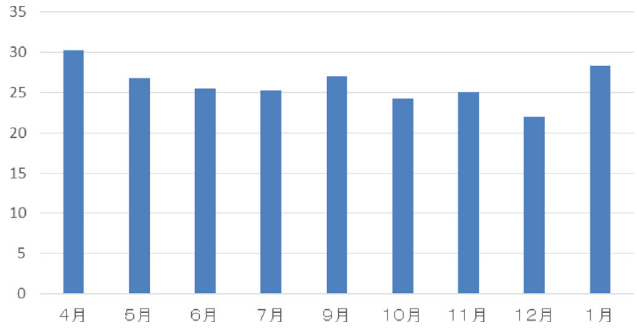

図1　一回の平均参加者数（月別）

三、参加者へのアンケート

二〇一八年度実施の最終週に参加者アンケートを実施し、三七名から回答を得た。

（一）回答者の概要

学年別では、一年生五名、二年生一三名、三年生二名、四年生一六名、その他一名であった。男女別では、男性一四名、女性二三名であった。学年、性別の偏りについては、普段の参加者においても同様の傾向があるため、おおむねそれを反映している。その他一名は卒業生であった。

（二）参加のきっかけ

参加のきっかけについて、「偶然通りかかった」、「他学生からの紹介・案内」、「教職員からの紹介・案内」、「その他」からの選択を求めた。結果を図2にまとめた。

「他学生からの紹介・案内」（二二名）が最も多く、次いで「偶然通りかかった」（一二名）であった。最も少なかったのは「教職員からの紹介・案内」（一名）であった。

いきなり一人で参加し始めるというよりは、偶然通りかかって参加した学生が、それ以降に知り合いや友人を伴って参加していると考えられる。「教職員からの紹介・案内」が非常に少ないのは、他の教職員の認知度の低さがある。他方、現場の雰囲気が学生の参加意欲を引き出していると考えると、教職員からの紹介・案内という経路はあまりなじまないとも言える。ただ現場では、入ることをためらいつつも、興味ありげに看板にじっと目をやる学生を見かけることはある。そうした時には担当者がさりげなく声をかけ、気楽に参加するよう促している。

（三）参加歴

参加歴について、「一年未満」、「一年以上二年未満」、「二年以上三年未満」、「三年以上」、「その他」からの選択を求めた。結果を図3にまとめた。

「一年未満」一〇名、「一年以上二年未満」九名、「二年以上三年未満」八名、「三年以上」一〇名であった。「その他」を選択した者はいなかった。あまりバラつきが見られないのは、学年により在籍年数が異なるためであろう。そこで、三、四年生のみを取り出してみると、「二年以上三年未満」が八名、「三年以上」が七名おり、二年以上参加した学生が八三・三％であった。

こうしたことから、低学年時に参加した学生が、学年が上がっても継続して参加している傾向がうかがえる。

（四）参加頻度

二〇一八年度後期の参加頻度について、「ほぼ毎回」、「月四回程度」、「月一回程度」、「その他」からの選択を求めた。結果を図4にまとめた。

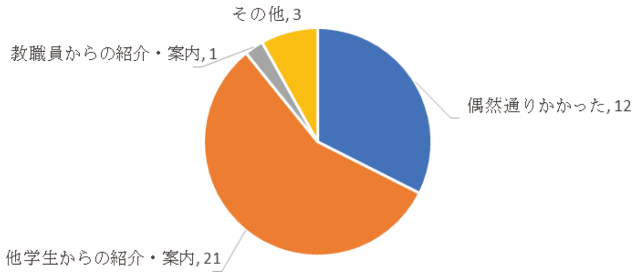

図2　参加のきっかけ

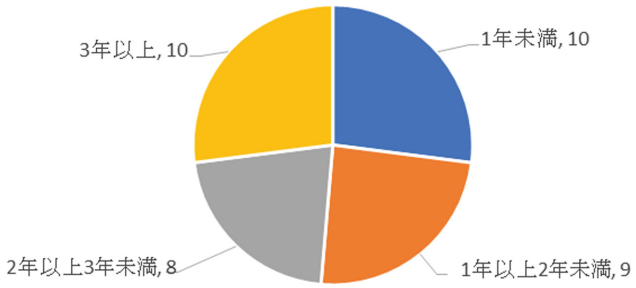

図3　参加歴

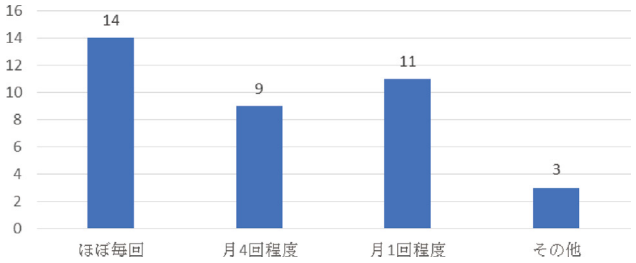

図4　参加頻度（後期のみ）

「ほぼ毎回」（一四名）が最も多く、次いで「月一回程度」（一一名）であった。「ほぼ毎回」と「月四回程度」（九名）を合わせると二三名であり、回答者の六二・二％がおおむね毎週参加していた状況がうかがえる。

（五）滞在時間

参加時のおおよその滞在時間について、「三〇分未満」、「三〇分以上二時間未満」、「二時間以上」、「その他」からの選択を求めた。結果を図5にまとめた。

「二時間以上」（一八名）で最も多く、ついで「三〇分以上二時間未満」（一六名）であった。「三〇分未満」は一名のみであった。長いか短いかは相対的なものであるが、本学の授業時間が一講時八〇分であることを考えると、比較的長い時間であるといえる。

滞在時間は学生の時間割と大きくかかわる。実施の時間帯に授業を履修している場合もあり、授業の合間の短時間に顔を出す学生もいる。滞在時間こそ短いが、その学生にとってはそれほど必要な場であるとも言え、滞在時間の長さ

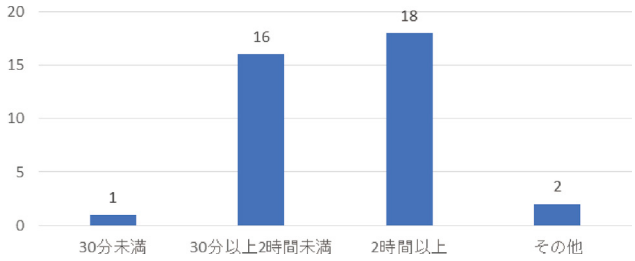

図5　滞在時間

がかならずしも必要性の度合いの強さを表しているわけではないだろう。

（六）参加の理由・目的、参加してよかった点（自由記述）

自由記述への回答内容のうち、主なものを紹介する。

〈参加の理由・目的〉

・さびしくて、趣味の合う人と話しをしたいと思って。自分の視野を広げるため。友達と話すため（勉強、課題についての相談、趣味の話し）。洋菓子和菓子、紅茶緑茶目的。（四年・女子）

・他学科の人の話しを聞いたり、ボードゲームをしたり、お茶を飲みながら課題や人間関係に追われる中で一息つく場所であったから参加した。（四年・男子）

・学科を越えて交流でき、刺激になると思ったから。絵を描いている人がおり、参考にしたいと思ったこともきっかけ。（四年・男子）

・先生に会える（以下略）。（二年・女子）

・人の声が恋しいから。教室よりも過ごしやすいから。たまに人の中にいないと、自分がどんどん無機質になっていくから。（二年・女子）

・ゆっくり過ごす時間がほしかった。（二年・女子）

・いろんな人の話しがきける。相談もできる。お茶とお菓子がおいしい。（一年・女子）

・他の学科や学年の人と話したかったから。大学でわからないことなどを聞きたかったから。（一年・女子）

・外のつながりも必要かと思って。（一年・女子）

〈参加してよかった点〉

・楽しい。コースの人達と話すより楽しい。やさしい人が沢山いた。（四年・女子）

・参加するのも抜けるのも自由で、お菓子や食べ物も充実していて、話す相手もいるので良い息抜きになっています。（四年・男子）

・人脈のつながりが濃いほうではないので、先輩からアドバイスをもらったり、逆も然りで有意義な時間が過ごせた。いろいろな人と他愛もない話しをするのも純粋に楽しかった。（中略）精神的に不安定だったり、体調を崩した時も相談にのって頂いて心の支えになった。（四年・男子）

・理解してもらえたかはともかく、際限なく自己満足な自己主張ができた。おいしいお菓子をたくさん食べられた。些細な発見があった。（二年・男子）

・おちつくー。（二年・女子）

・他学科・他学年の知り合いができた。（二年・女子）

・お菓子とお茶がおいしい。普段なら話せない先輩や他学科の人と話せる。のんびりぐだれる（素敵）。（二年・女子）

・自分の人間らしさが取りもどせていくような感じ。人として生きる中で、こういった休みもないといけないような気がする。個性的な人の集まりで、決していがみ合うこともないところ。心身ともにいたわりの場である。（二年・女子）

・のんびりできる。（一年・女子）

・参加前と比べてたくさん話せるようになった。大学生活で不安になるこ

とが減った。（一年・女子）

・他学科の友達ができた。悩みごとの相談ができた。いろんな人から意見をもらえた。（一年・女子）

「参加の理由・目的」では、他者との交流やコミュニケーションをあげた学生が二九名おり、大多数の参加者が他者とのかかわりを求めていたことがうかがえた。また、息抜きや休憩、癒しなどをあげた者も一二名おり、直接的な記載はなくとも推測される者を含めると、ここを安らぎの場としている学生は多い。これらは、「参加してよかった点」でも「おちつく」、「のんびりできる」などとしてあげられている。総じて、「ラーニング・カフェ」で、他の学生たちと一緒にリラックスして過ごすことができてよかったと参加者は感じていると理解できる。そうした中でも、お互いに学習や制作について意見をしたり求めたりという、学びあう学生のすがたも垣間見える。のんびり、ゆったりと過ごせる環境だからこそ、普段以上に安心してお互いに声を掛け合うことができたのかもしれない。

四、全体考察と実践上の課題

今回の調査では、「ラーニング・カフェ」への参加者数が年間をとおして安定的であることから、学生からは時期にかかわりなく求められていること、単発的な参加よりも、長期にわたるリピーターが多いことが明らかとなり、常連の学生にとっては、学生生活のなかでのひとつの居場所となっていることがわかった。大学内外には、学生にとって居場所となりうるさまざまな場がある。クラスやゼミ、クラブやサークルはもちろんのこと、本学においては各種のプロジェクト活動もそれに相当するかもしれない。実際、「ラーニング・カフェ」に集う学生も、さまざまな活動に参加している。ただ、ここに集う理由は、それらとは大きく異なるということが、今回の調査からは感じられる。担当者としての日ごろの実感も交えて少し考えてみたい。

多くの教員が実感するように、新たな環境や人間関係への不安を訴える学生は決して珍しくない。学生生活が進んでも、なかなか馴染めなかったり、無理をしたりしている学生もいる。しかし、そういう学生も、決してコミュニケーションや人間関係構築を完全に拒否しているわけではなく、むしろ求めている。ただ、今の学生に求められるコミュニケーションの多くはグループディスカッションやプレゼンテーションなど、ある目的の達成や生産性の向上のためのものである場合が多いのではないだろうか。こうしたコミュニケーションは刺激的であり、学びや気づきを得る貴重な機会であろう。学生にとって必要な経験ではある。

しかし、日々の生活においては、刺激的なコミュニケーションだけではなく、安らぎや安心感をもたらすコミュニケーションが欠かせない。かつてに比べて非常に忙しい現在の学生にとって、仲間との他愛もない話しや自由なおしゃべりは安らぎとなり、張り詰めたものを緩めてくれる。「さあ、がんばろう」と気持ちを切り替えるきっかけにもなる。刺激的なコミュニケーションに焦点が当てられることが多い中、自由にゆったりとおしゃべりをしたり、交流したりするようなコミュニケーションの機会は、大学にはあまりない。とするならば、学生生活や人間関係に苦労していたり、かなり無理をしている学生にとっては、安らぎのひと時となる「ラーニング・カフェ」は、かけがえの無いものという と言いすぎだろうか。

学生同士のコミュニケーションだけでなく、担当者である大人の存在も安心感や安らぎを支えている。担当者のひとりは女性である。学生が彼女を求める様子は、どこか母と子のような雰囲気が漂う。「ちょっと聴いて」。そういう素朴な気持ちをふっと素直に出せるのだろう。何も話さなくても、一緒にいるだけで安心しているようでもある。学内にこういう場が他にあるのかといえば、全く思い当たらない。

大学生活の居心地のよさは、共に過ごす学内の友人知人の存在によるところが大きいことや、孤独が心身の健康に及ぼす悪影響などが指摘されている。「ラーニング・カフェ」に行けば必ず誰か仲間がいて、ほっとできる時間をもてるという見通しは、大学生活の居心地を良くする方向に作用し、孤独を予防、緩和している可能性は十分にあるだろう。実際に、メンタル面の不安定さを呈し、授業やゼミへの欠席を繰り返しつつも、「ラーニング・カフェ」にはつながり続け、卒業までたどり着いた学生もいた。孤立しがちな学生にとって、緩やかな人間関係を保ち続けることができることは、ささやかながら自信となるだろう。彼らの今後を考えるとその意義は大きい。

本活動が長期欠席や退学の予防にどれだけ貢献したかを数値によって示すことは難しい。しかし、先ほど紹介した知見、今回の調査結果や担当者としての実感、実際のケースなどから総合的に考えると、一部の学生にとっては学生生活を維持・継続する上でこうした場が必要であり、長期欠席や退学の予防に一定の役割を果たしていると言えるだろう。

最後に、今後の課題をひとつだけ示しておきたい。今回の調査では、常連の学生が長期にわたって参加する傾向が明らかとなった。しかしこれは、新たな学生が参加しにくい状況や雰囲気を作り出している可能性があるため、注意が必要である。継続的な参加を望む学生を歓迎しつつ、興味をもった学生がいつでも気軽に参加しやすい環境を整えることは今後の課題である。

具体的には、①規模を大きくしないこと、②ひとつの集団としてまとめないこと、などである。規模が大きくなれば、それだけほっとできるような雰囲気は損なわれる。担当者が一人ひとりに気を配ることも難しくなる。また、あまり「できあがった集団」のように見えると、入りにくさを感じさせてしまう。閉じた印象を与えぬよう、テーブルの設定や座る位置などへの適度な配慮と工夫を心がけ、活動の趣旨やねらいに相応しい環境づくりを行いたい。

長期欠席や退学の予防への取り組みは、学生自身が成長を実感することで、学生本人にとって意味あるものとなるだろう。学生生活をどのように経験しているかは一人ひとり異なる。今後も目の前の学生の側に立った理解に努め、学生にとっての成長とは何かを問い続けながら、授業外学生支援に向き合いたい。

参考文献

甲村和三、飯田沙依亜「大学生活において居心地の良さを感じる要因 ―大学生を対象とした自由記述法を用いて―」愛知工業大学研究報告』第四七号、二〇一二年、一三三－一三七頁
杉岡良彦「孤独に関する医学的研究と人間の孤独性」、『医学哲学 医学倫理』（三二）二〇一四年、一一－二一頁

付記

本稿掲載の参加者数に関する集計データは、本活動の担当者のひとりであるかすのちえ氏がまとめたものを使用した。また、氏には執筆にあたりコメントをいただいた。心より御礼申し上げたい。